

【連載】

老健仕事人  介護福祉士

# 介護職員としての 自覚と葛藤

[第3回 最終回]



小山大介 [こやま だいすけ]

介護老人保健施設せんだんの丘(宮城県)  
介護課長

2度目の在宅復帰  
促進ユニット編 ①目標達成のためのアプローチ方法

入社して10年以上が経過し、3回目の異動となった。異動先は、新人時代に配属されていた「在宅復帰促進ユニット」である。入社時と異なるのは、「在宅復帰促進ユニット」としての立ち位置だ。特養の待機施設だった時代から、「在宅強化型老健」を牽引しているという自負が強く感じられるユニットへ変貌していた。ベースは基本ケアの徹底であるのだが、入所後、利用者・家族の気持ちが在宅から離れていかなないように鮮度を大切に、PDCAサイクルをどんどん回していたのが印象的だ。「在宅復帰」という結果が伴えば、介護職員の主体的な取り組みも促進されていく。しかし、「できることは自分でしてもらう」という方針が徹底されていたのだが、目標達成のために拡大解釈されているように映った。在宅復帰後の生活も見据えてのことだが、異動した直後から「〇〇さんは依存的なので、甘やかさないでください!」と、後輩の職員から注意され、主事(サブリーダー)である自分が委縮するほどの剣幕だった。

ある日、片麻痺の男性利用者が、パジャマの上衣を自力で着替えるよう職員に言われ、30分以上もベッドサイドの車いすに座っているのを見かけた。「手伝って…」と言われたが、ユニットの方針や、その職員の顔が頭に浮かんで一瞬躊躇した。

「やらせる側」「やらされる側」という関係が、目標達成のためならば許されるという考え方は、非常に危険だ。在宅復帰の促進も重要だが、介護という仕事的前提をはき違えてはいけない。

2度目の在宅復帰  
促進ユニット編 ②統一したケア

日常のケア場面で、違和感に敏感になってきたというのは成長なのだろう。問題なのは、それにすら気

づいていない状態だ。過去を振り返れば、そんな場面はたくさんあった。

認知症専門棟に配属されていたときの話だが、就寝時に全利用者の義歯を預かるというルールがあった。ある日、就寝介助後に、1人の利用者が「入れ歯がないんだけど…」と不安になって起きて来た。「夜間は全員預かる」がユニットの決まりごととなっている以上、返さずに納得してもらうことが真面目な介護職員のミッションだ。いかにも集団ケア的な発想だが、繰り返されるやり取りを見ていたベテラン看護師が、しびれを切らして「返しちゃったらいじゃない!」と声をかけてきた。ハッとした。「返す」という選択肢が自分の頭のなかには存在しなかったからだ。一気に気分が楽になり、義歯を返すと、以降はすぐに休まれた。巡視時には、義歯を外して枕元に置いて入眠しており、結局そっと回収したのだが、ある種の成功体験として、いまでも鮮明に記憶に残っている。

こちらで義歯を管理するべきかどうかは、本人の希望はもちろん、認知機能や、転倒・紛失・誤飲・義歯の破損などのリスクを踏まえ、利用者の状態によって個別に判断する必要がある。しかし、先輩職員からよく言われた言葉に「ケアの統一」がある。介助方法や、対応を統一することで、適切な評価をし、ケアの効果を高めたり、利用者の混乱を最小限にしようとする意図は理解できる。だが、統一することが、「集団管理・業務分担の遂行」という目的にすり替わっている場合も多い。そもそも、日々変化する利用者の状態に応じて、ケア方法を柔軟に選択し、選択した根拠を示すことができるのが本当のプロだ。しかし、最初から決まりごとをつくっておいたほうが利用者を管理しやすいだけでなく、上司が部下を管理しやすいという側面も否定できない。

またあるユニットでは、利用者から食パンを温めて